

ック・フォーカスを特別に長くしました。完成した魚眼投映レンズは 6 群 6 枚構成で、F2 焦点距離 8 mm、画角は 180° でした。

試写は大成功でした。しかし、フィルムの製作は多くの未知に直面しました。ジェット・コースターの場面なら迫力満点だろうと、はじめは誰も考えましたが、実験してみると案外つまらないものでした。鉢のなかで泳いでいる金魚を下から撮影したフィルムは、映写してみるとたいへんな迫力でした。全天映画といっても、やはり観客席の正面があることもわかりました。また、フィル

ムが高熱にさらされるので、50 回も映写すると赤だけ褪せしてとんでしまうことも経験しました。

「オーストラリアのバリア・リーフへ行って、鯨が人を襲うところを撮影してこい」と社長は命じましたが、これはいろいろな事情で実現しませんでした。ジョウズ（人喰い鯨のアゴ）という外国の恐怖映画が多くの観客を動員したのは、それからずっと後のことでした。

それにしても、多くの人たちが「魚眼というのは妙にゆがんで写るレンズだ」としか考えていないことは、設計者から見ればほんとうに残念です。

NEWS

浦田・新島新彗星 (1986 o)

静岡県清水市の浦田武氏は、小惑星の協同観測者である群馬県尾島町堀口の新島恒男氏が 1986 年 10 月 30.57911 世界時に、口径 31 cm の反射鏡で撮影したフィルム上で、光度 16 等級の移動天体を発見し、直ちに IAU 小惑星中央局へ連絡した。IAU では 1986 UD と仮符号を付けたが、11月3日に高知の関勉氏による写真観測で、コマが認められて、彗星であることが判明した。

MPC 11339 に発表された軌道要素は次の通りで、周期 6.42 年の短周期彗星であり、日本のアマチュアが発見した彗星としては最も暗いもので、日本人として 46 個目、周期彗星で 7 個目に当る。

$T = 1986 \text{ Nov. } 23.132 \text{ ET}$

$$\left. \begin{array}{l} \omega = 21^\circ 566 \\ \Omega = 31.269 \\ i = 24.044 \end{array} \right\} 1950.0 \quad \left. \begin{array}{l} e = 0.58192 \\ a = 3.45595 \text{ AU} \\ P = 6.42 \text{ 年} \end{array} \right\}$$

$$q = 1.44485 \text{ AU}$$

(香西洋樹)

日本人 4 人による新彗星 (1987 c) の発見

熊本県水俣市の西川登氏、長野県佐久町の高見沢今朝雄氏、岡山県津山市の多胡昭彦氏と埼玉県本庄市の三ツ間重夫氏は、うお座に 9 等級の新彗星をそれぞれ独立に発見し、東京天文台へ連絡して来られた。比較的近くに Sorrells (1986 n) 彗星があることから、発見者の方々も大いに悩まれたようであった。東京天文台では確認の手配をする一方、4 人のベテランによる観測であることから、IAU 天文電報中央局へ通報した。IAU から折り返し、Nishikawa-Takamizawa-Tago (1987 c) 彗星として通報があった。4 人の方々の発見時刻、発見位置などは次の通りである。(発見時刻は日本標準時)

西川氏 1987 年 1 月 19 日 20^h35^m 発見、20 日に移動を確認後通報。15 cm, F8, 屈折。

高見沢氏 1987 年 1 月 20 日 18^h35^m 発見、15 cm 双眼。
多胡氏 1987 年 1 月 20 日 19^h20^m 発見、15 cm 双眼。
三ツ間氏 1987 年 1 月 20 日 19^h25^m 発見、12 cm 双眼。

多胡氏にとっては Tago-Honda-Yamamoto (1968 IV), Tago-Sato-Kosaka (1969 IX), Suzuki-Sato-Seki (1970 X) に続く 4 個目の発見、高見沢氏にとっては Takamizawa 周期彗星 (1984 VII) に続く 2 個目の発見になる。西川氏は現在 65 歳になられる方で、Haneda-Campos 周期彗星の発見者・羽根田利夫氏が発見当時 69 歳であったのに次ぐ高齢である。

なお、彗星名には発見順に名までの 3 名前が付けられることから、第 4 発見者・三ツ間重夫氏の名前は付けられなかったが、独立発見の名誉はそこなわれるものではない。

(香西洋樹)

Terasako 彗星 (1987 d) の発見

静岡県浜松市の航空自衛官・寺迫正典氏は、1987 年 1 月 24 日 18 時 30 分 (J.S.T.) に、ちょうこくしつ座に 8 等級で視直径 3 分角の彗星状天体を発見し、翌 25 日 18 時 10 分 (J.S.T.) に東北へ約 1.7 度移動していることを確認して、東京天文台へ連絡して来られた。東京天文台では、夕方の南西の超低空であり、連絡を受けた時には、すでに国内での確認は不能であったので、IAU へは彗星かも知れぬとして連絡した。翌 26 日に、堂平観測所の 50 cm 彗星写真儀で、この彗星像の写真が得られ、彗星であることが確定した。ちなみに、この彗星は、日本人による 48 番目の発見である。(香西洋樹)

ヘルクレス座 1987 年新星

兵庫県加古川市の菅野松男氏は 1987 年 1 月 27.847 日 (時刻は世界時) に撮影したヘルクレス座の写真フィルム上に約 8 等級の新星状の像を発見し、翌 1 月 28.8 日に確認して東京天文台へ連絡して来られた。一方、岡山県倉敷市の本田実氏も、1987 年 1 月 25.847 日、27.85 日、28.85 日に撮影したフィルム上で約 8.5 等級の新星状の像を発見して東京天文台へ連絡して来られた。東京

天文台への連絡は、両氏共 1 月 29 日 (J.S.T.) であった。東京天文台では、確認の手配をすると共に、明け方の東空の低空であることを考慮して、菅野-本田天体として IAU へ連絡した。IAU からはヘルクレス座の新星かも知れない天体を、菅野、本田両氏が発見したという内容の電報が返って来た。1 月 30.870 日に岡山天体物理観測所の乗本祐慈氏により、 $H\alpha$ を含む波長域のスペクトル写真が撮影され、 $H\alpha$ の強い輝線が検出された。

菅野氏により 1 月 28.853 日に撮影されたフィルム上で、香西が測定した位置は次の通りである。

赤経 = $18^h 41^m 26^s.7$, 赤緯 = $+15^\circ 16' 16''$ (1950.0)

尚、この新星は日本人により発見された新星、または新星状天体として 31 個目になり、本田氏にとっては 11 個目、菅野氏にとっては菅野天体と称されている V1143 Ori に続く 2 個目ということになる。

(香西洋樹)

旅・星・そしてお酒

水 間 嘉 典*

SL がひく客車に乗って、やっと街に着き、宿に泊まる。朝、天文学会の会場に行く。春と秋の天文学会の講演がはじまる。

そうでない時は、朝早く着く。急行列車か鈍行列車で行く。毛布を持って行って、客車の座席の下か、通路に敷いて、ねてゆく。

駅に着くと、吊床の様にしばって、駅の一時あづけにあづけ、駅前の食堂で朝食をたべ、道をたずねて会場に行く。

現在のように新幹線でいってビジネスホテルに泊まったり、特急の寝台列車で行くことはなかった。

昭和 20 年代後半より、昭和 30 年代前半の私の天文学会出席のための旅の前半である。

かえりも、宿で一泊して、朝早い列車でかえるか、やはり夜行の列車に乗って、やはり客車の床に毛布を敷いて、ねてかえる。

男の人も女の人もまたいでゆく。

座席の下でねると、ぐっすりねてしまう。しょう突しようといふ火災がおころうとそんなのおかまいなくねる。

そして大阪の街にかえりつく。

東京だと、すこしお金を出して前の子の特急でゆか、走りはじめたビジネス特急「こだま」に乗ったが、多くは夜行の急行列車で朝早く東京駅についた。

天文学会に最初に出席したのは、昭和 26 年の京都の秋の学会であったと思う。記憶ちがいだと次の 28 年かも知れない。

大阪から朝早く国電で京都駅に着き、親切な人に教えられて、市電に乗って京大の宇宙物理学教室にいった。

そこで講演を聞いた。

これが大阪ガスで仕事を持っていた私の、それから 30 有余年続くことになる天文学会の春と秋の出席の始

まりであった。

東京・水沢・仙台と宿に泊まる。まくらもとに電話があればもうだめである。天文学会の出席の旅費をかせぐために週 2 回宿直をした。夜半に電話が鳴れば、ガス洩れの事故である。ぐっすりねていて、新築の家がやけて新品のメーターを焼いた。叱責される。

まくらもとに電話があるとうつらうつら夜半に目がさめる。十年ぐらいつづいた。

宿でゆっくりねむれるようになったのは、ガス機器の品質管理と返品の仕事をするようになってからである。

旅もなかなかであった。

今こそ新幹線があつて近い様な感覚を持つが、大阪東京間は早くて八時間、鈍行だと一日かかった。そのころ姫路発大船行の鈍行列車が日に四列車もあった。

大阪から仙台、水沢までは二日がかかりであった。大阪から夜行の青森行の急行列車に乗り、青森から上りの上野行きに乗りついで行けば、水沢は朝である。

仙台は日本海の街であり、一日がかかりで奥羽山脈をこえて、夕方おそく仙台に着く。

東京から行けば、一日がかかりで東京に行き、夜行の列車で仙台は朝である。

東京までを夜行の列車で行き、朝が東京駅。上野より一日がかかりで仙台につき、その日泊りで、あくる日から天文学会、おわれば夜行で上野に出て、あくる日、一日がかかりで大阪にかえるか、おわった夜は泊まって、あくる日朝早く仙台を出て一日がかかりで上野に、そして夜行で大阪へかえる。

どちらも夜行列車で正式の寝台には乗れず、特別三等寝台と称して座席の下か通路に毛布を敷いてねていた。

オハネ 10 という寝台車に乗ったのはこの寝台車がなくなるすこし前であった。

* Yoshinori Mizuma: